

「自分の音で思いをこめて表現し合える子の育成」

俣山 恵 白間 雅裕

1. 研究テーマについて

(1) 音楽科における問題意識

国際化、情報化が進み、社会構造が急速に変化する現代に生きる子どもたちにとって、身の回りにあふれる自国や諸外国の多種多様な音楽を、将来にわたってどのように受け止め、どう理解していくかが大切である。

本校の子供の様子を見ていると、教科書の文言をなぞるような言い方でしか自分の考えを言葉にできなかったり、楽譜に記された記号や用語のとおり演奏しているのみにとどまっていたりと、どのように演奏したいかという思いや意図を持って表現するといった思考・判断ができていないと感じる。それは、子供が自身の音楽表現や音楽を聴いて感じ取ったことを、自分なりに解釈して意味づける経験が不足しているからではないかと考える。そこで、音楽科では、子供が音楽から感じ取ったことを、自分なりに解釈や意味づけをし、自分の思いや意図に合う表現を探究することが必要であると考えた。また、子供が自分の思いや意図を音楽で表現できないことは、自分の表現に対する自信のなさに起因しているとアンケート等から分かっている。そこで、子供が互いの感じ方や表現の仕方を認め、共に音楽をつくり上げることによって、自信を持って自ら音楽表現できる基盤を育成することが必要であると考えた。これらは、子供が表現したい自分の音を探究すること、そして自分の思いを音楽にのせて表現し合えることであると言える。そこで教科テーマを「自分の音で思いをこめて表現し合える子の育成」と設定した。

(2) 「自分の音で思いをこめて表現し合う」とは

「自分の音で思いをこめて表現し合える子」とは、自分の思いや意図を音楽で表現し、他者とかかわり合いながら音楽をつくり上げていく子どもであると考えられる。

「自分の音」で表現するには、こう表現したいという「思い」を持つことが不可欠である。また「思い」を表現し合うためには、自己や他者の音、そして自己と他者を含めた自分たちの音を「聴くこと」、そして自分の奏でる音が自己や他者の「思い」に合っているか思考・判断し、「思い」と実際に出された音を比較した上で、どうすれば「思い」に合う表現になるか試行錯誤しながら探究していく過程が重要であると考えられる。子供が自分の音を聴き、考え、表現することを繰り返す経験を重ねていくことで「自分の音」に近づいていく。なお、授業で活動する際には、合唱や合奏など集団で1つの演奏をつくり上げる場合もあるため、「自分の音」には「自分たちの音」という意味が含まれる。

加えて、自分の音を探究する過程においては、子供同士の相互作用による影響が必ずある。子供同士が関わり合う中で、友達の表現を参考に自分の表現を工夫したり、友達と合わせることによって互いの足りない部分を補ったりと、関わり合いによって音楽がつくられていくと同時に、子供一人ひとりの表現力も高まっていく。そういった意味において、音で思いを「表現し合う」ことが大切なのである。

2. 全体研究テーマとの関連（音楽科における「こえる学び」とは）

音楽科では、全体研究テーマにおける学習環境デザインの3つの視点（「没頭」「実践」「往還」）を踏まえ、「こえる学び」を生み出すためには、子供が「自ら課題を持ち、自ら学びを拡げていくこと」が重要であると考えます。

子供が学習に「没頭」するためには、授業の内容や活動を自分事と捉え「自ら課題を持って」学習を進めていくことが必要である。そのためには、まず子供が課題意識を持てるような題材や教材の設定が必要であると考えます。そして、題材や活動単位での目標を明確にすることで、子供が何をすべきか分かるようにし、子供が自ら見通しを持って計画的に活動できるよう授業をデザインする必要があると考えます。

子供が「自ら学びを拡げていく」ことは、子供が「実践」し続ける学習者として取り組んでいくために不可欠である。音楽づくりのような創作的な活動ではもちろんのこと、既成の楽曲を演奏する場合でも、楽譜通りに出来たら終わりではなく「次に何が出来るか」や「もっと出来ることはないか」といった、さらによくしていこうという意欲を持って取り組んでいける子供の姿を目指したい。

そのためには、自分の学びを振り返ること、そして振り返る際には既習事項や生活経験等と結びつけて考えることが重要である。自分の学びを振り返るためには、自分の音や音楽表現よく聴き吟味、修正をしながら試行錯誤する過程が重要である。「きく」というのは自分の経験と照らし合わせて理解することであると田中¹が述べているように、既習事項や生活経験と結びつけて考えることが重要である。子供が思考・判断することを通して表現をする際に表現の基になるイメージや素材と関わる心情は必ず、自身の生活経験が関わってくるからだ。

そして他者と関わり合い影響し合いながら学びを拡げていくことが重要であると考えます。音楽の授業は、音を通じたコミュニケーションにより成り立っている。特に合唱や合奏など集団で合わせる行為は、個人の表現が集団に影響を与えるので、個人＝集団の一員としての振り返ることで意識を個人から全体へ向けていくことが必要であり、自己と他者と関わり合い、影響し合いながら学びを拡げていくことが重要なのである、以上「自分の学びを振り返り、他者と関わり合いながら学びを拡げていくこと」が、「往還」の視点において重要であると考えます。

以上より、自ら意欲的に、他者との関係性の中で自分の音楽を捉え、表現方法を探究できるような授業デザインにする必要がある。そこで音楽科における「こえる学び」を生み出す子供の姿を次のように考えた。

子供が自ら課題を持ち、自己の表現を振り返りながら、思いや意図を持って「自分の音」を探究する姿

3. 研究の重点

①子供が自ら課題を持つための題材や教材の選択

子供が自ら課題を持つためには、授業での学習内容を自分事としてとらえなければならないと考えます。子供にとって、普段の生活経験と、学校の授業で扱う音楽とに関わりや結びつきが感じられない場合、自分事と感じるのは難しいだろう。授業で扱う音楽と子供の生活経験とは関わりがあり、身近なものと感じられれば、親しみがわき、子供が興味・関心を持って取り組めるだろうと考えます。また、音楽

¹ 田中龍三「日本教育大学協会 全国音楽科部会研究大会」講演資料より（2018.7.31）

に苦手意識がある子供にとって課題が難しすぎると感じると、取り組む際の見通しが持ち辛く、意欲低下の原因にもなりうる。教師が課題をよく吟味し、教師が与える部分と子供が考える部分のバランスをとりつつ、子供が学習の計画や進め方などを自分で考えられる十分な時間や選択肢を用意することで、子供が自ら課題を持って学習に取り組めるようにしたい

②子供が自分の表現を振り返る手立ての工夫

前項で、子供が自ら学びを拓げるためには「自分の学びを振り返ること」、「他者と関わり合い影響し合いながら学びを拓げていくこと」が重要であると述べた。子供が学びを拓げるためには、**他者と関わりながら、「課題をもつ⇔表現する⇔振り返る」というサイクル**によって自分の学びを見る目を育てていくことが必要であり、これらを習慣づけ、積み重ねていくことで学びを見る目が養われていくと考える。これらは、「課題をもつ⇒表現する⇒振り返る」という順序で行われるのではなく、「**課題をもつ⇔表現する⇔振り返る**」のようにそれぞれが往還しながら行われていると考える。つまり、子供は表現しながらその都度課題を持ち次の行動をするが、次の課題を持つためには自分の表現を振り返る必要があり、振り返ることと課題を持つことは同時に行われているというイメージである。

このサイクルを保証するには、子供が自分の表現を聴き取りよさや特徴を感じ取る**聴取力（知覚・感受の力）**、聴き取った表現を吟味し評価する**思考力・判断力**、それらを音楽に乗せて伝える**表現力**が必要である。聴取力を高めるためには、子供が学校内外の様々な聴取経験を通して、それらを自分なりにどう感じ、どう考えるかを積み重ねていく習慣づけによって育てていくと考える。思考力・判断力を高めるためには、聴き取り、感じ取ったものと自分のイメージとを既習事項と関連付けて理想とする表現を新たに探したり、友達の意見をもとに自分の表現を考え直したりと、実際の表現に対する自分の受け取った感じ方とイメージや理想の表現との「**関連付け**」と「**比較**」をすることが大切であると考えられる。表現力を高めることは、いかに思考・判断するかと大きく関わる部分である。自分の理想の表現を追究する過程で新たな表現の仕方を探っていく中で、創意工夫して表現する力とともに技能を身に付けていこう。教師は、これらのサイクルの往還がスムーズに進むよう、教材や学習環境の整備や、教材や指導の工夫をする必要がある。